



AET2

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part II

Tuesday 2 June 2015 9 to 12.00 pm

Paper J13

Advanced Japanese texts

Answer ***either*** section A **or** section B.

Write your number **not** your name on the cover sheet of ***each*** answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

Shinjigen dictionary

Kojien dictionary

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

SECTION A

(1) Translate into English the following passage from an **unseen** text: [40 marks]

薬より養生^{ようじよう}

病気になって薬を飲むより、ふだんから健康に心がけて、体を大切にして暮らすことが大事だということ。「医者より養生」ということわざもある。

これには江戸時代にはだれでも勝手に医者を開業できたので、医療の知識も技術もおそまつな医者が少なくなかったという事情がある。そうした医者が薬を処方・調製するのだから、「毒にも薬にもならぬ」というのはよいほうで、「薬から病を起こす」ということもよくあった。これは売薬についても言えることである。薬もだれもが勝手に作って売り出してよかったので、いいかげんな薬がたくさん出回っていた。

この「薬より養生」は病気になる前の心がまえであるが、病気になった後もなまじつかな薬を服用するよりも、薬など飲まず「薬用いずして中医^{ちゆうい}を得る」といわれた。人間には自然治癒力が備わっていて、薬を飲まなくとも中ぐらいの医者にかかったのと同じだということ。その力を大事にして、「薬より看病」「一に看病、二に薬」といわれた。

これらのことわざは人々が病気の折ごとに口にしたことである。そして「大病に薬なし」ということも知っていた。現代のわれわれは江戸時代の人の何十倍も薬を飲んでる。

医者の不養生

※滑稽本『風流志道軒伝』

医者は明治初期まで何ら必要な資格がなく、だれでも勝手に開業することができた。そのため江戸時代にはしっかりと医術を修業した医者だけでなく、藪医者にも達していない^{たけのこ}。藪医者も開業していた。漢方には外科手術がなく、口達者なら藪医者でも通用した。

このことわざは藪医者ではなく、ふつうの医者が患者には健康的な生活を説いていながら、自分自身は不養生をしているのである。他人には立派なことを言いながら、自分は実行しないた^{たけのこ}としてよく使われる。類義語に「紺屋の白袴^{こんやしろばかま}」(90ページ)、「髪結いの乱れ髪」などがあり、当時の人がそれぞれの職業人を的確に見ていたことがわかる。

江戸初期には医者は多く儒者(学者)が兼ねていて「儒医^{じゆい}」とよばれた。漢文で書かれた医書は儒者しか読めなかった。その後、医者は職人として認知されたが、社会的には儒者・僧侶とともに特別な立場におかれた。幕府はこの三者に庶民を教導する役割を担わせなかった。しかし「学者の不身持ち」「坊主の不信心」とともに不養生・不行跡な医者は多かった。幕府が知識人の代表とした医者・儒者・坊主に対しては批判的なことわざが多く、江戸庶民の健全な反応といえる。

TANNO AKIRA, *Edo no kotowaza* (2004), p. 50 and p. 53.

(TURN OVER)

(2) Translate into English the following passage from a **seen** text: [30 marks]

大ベストセラー『諺臍の宿替』

『諺臍の宿替』には、十五丁（枚）を一編にまとめたものと、十一丁で一編のものとの二種類がある。同じ編のものでも表紙や題簽が違っていたり、丁の順序が前後するものがあることから、もともとは一枚摺りとして売られたものか、あるいはそれらをまとめて一冊本として売られたものであろうか、という推定がある。ほぼ同じ頃、江戸では一枚摺りの内容が酷似したものが刊行されていた（画工名は不明、ただし芳梅ではない）。海賊版の横行していた当時のこともあり、本書かあるいは江戸の一枚摺りのどちらが先行したかはにわかに決し難いものがあるが、筆者には大坂での本書が先行したと覚えてならない。

この十五丁本が何編まで刊行をみたかは確認できないが、十二編までは実現している。また武藤氏からは、本文中に「諺草が十五冊で七拾五匁」の文言のあるところから、あるいは十五編までは刊行をみたかと思われること、十五丁本の板木を利用して、十一丁で一編に仕立て直したのは後のこと。三編以降は文字こそ違え、題簽の多くは「諺臍の宿替」で通しており、この書名がはっきりと定着していたこと。厳密に言えばこの十五丁本第三

Question 2 continued...

編からが『診臍の宿替』であるとみるのが妥当であることが指摘されている。

私自身は、パリの国立図書館で以前十五丁本の『診臍の宿替』（以下パリ本と仮称）をみる機会があった。それは十五年以上前のことであり、当時は後日これに関与するとは全く考えもなく、ただ面白さのあまりついメモを取ったにすぎなかった。

同館内にあった『図書総目録』によると、同書の九編は日本の某大学に所蔵されている旨の記載があったため（当時は同書が十五丁本と十一丁本の二種類があるなどとは予想できず）、日本に同一のものがあるなら何もメモをすることもあるまいと九編を手に取りなかつたのは、今にして思えば不覚といえ不覚であった。参考までにパリ本（いずれも十五丁本）の題簽での「ことわざ」の表記は次のとおりである。

MINAMI KAZUO, *Edo no kotowaza asobi* (2010), pp. 13-14.

(TURN OVER)

(3) **Write a commentary** in English on this **unseen** text, by giving replies and views on the statements after the text (around 250-300 words for each). [30 marks]

薬売り

現代の「セールスマン」

有名な富山の薬売りは江戸の頃から全国をブロック分けしてチームを組み、日本国中をセールスして歩いていきます。

手つ甲と脚絆を着け、大きな柳行李を五段重ねて背負って出発します。頭を越える高さの柳行李は入れ子式になっていて、下に行くほど大きくなります。中身が減ったら落とし込み、だんだん低くなるのです。

一番上に入っているのが「懸場帳」という顧客リストで、お得意先の家族構成、好みなどが事細かに書き込まれたデータベースです。懸場帳が古くて厚いほど、信用のある商人ということでステイタスになります。懸場帳は親から子へと代々引き継いでいくものです。一段目には他に「矢立て」という筆記具、日記、そろばんなどが入ります。

二段目には、お客に渡す土産一式——代表的なのは、薬売りだけが持っている、様々な情報が盛り込まれた「売薬版画」という錦絵です。俳句の好きなおじいさんに

は芭蕉ばしやうの絵をプレゼントし、食べ歩きが好きな人には、「これとこれを食べ合わせとお腹なかを壊します」という食べ合わせ集をあげるなど、いろいろ工夫します。農業で忙しい人には、種まきから収穫までいい日を選んだ農事暦をプレゼントします。一番人氣があつたのが、都での芝居絵や役者絵で「こういったものが都で流行はやっている」という情報も満載して、得意先を回るのです。

三段目には、前の年に来て置いていき、飲まなかった古い薬を回収して入れます。

四・五段目には、新しい薬が収められています。また五段目の底には、麝香じやこうを忍しのばせてあります。荷を解くと、部屋いっぱい麝香のいい香りが広がり「ああ、今年も薬売りが来てくれた」と好感を持たれます。

料金は、「先用後利せんようこうり」といって、先に用いて後で利を得る——「使った分だけいただきます」という信用商売です。毎年、同じ地域に同じ薬売りが同じ時期に来るので、家族ぐるみのつきあいになり、悩みごとや相談を持ちかけられたり、一日その家に逗留どちゆうしたりすることもあります。

代わりに集金する代理人もいましたが、彼らは連判で押した証書の他に、口演で代理人であることを証明します。薬売りは、それぞれ独特の口上こうじやうで述べるので、その独自の口上を伝授してもらい、お得意様の前で口演し、間違いなくその人の代理人だと

(TURN OVER)

いうことを証明して集金に当たるのです。
越中富山の薬が名高くなったのは、元禄三（二六九〇）年の出来事がきっかけだったといわれています。江戸城内で、三春藩主の秋田河内守という殿様が、突然の腹痛に襲われ苦しんでおり、そこに居合わせた富山藩の前田正甫という殿様が、自分の常備薬を差し出したのです。「反魂丹」という薬だったといわれていますが、それを服用したところたちどころに治り、居合わせた大名たちが国元に帰って「越中富山の薬はすごかったぞ」と口々にいうものだから、全国にその名がとどろきました。
国元を出る時は沢山の旅費を持ち、帰りは集金したお金を持っています。目指すブロックごとに集団で出立し、帰国しますが、実際にお得意様を廻る道中は一人きり――。山間部の狭い道もあって、命がけの旅です。危険な目にも遭いますが、お国のため。一段目に小さな仏像を忍ばせて歩く人も多くいました。

SUGIURA HINAKO, *O-Edo de gozaru* (2003), pp. 154-56.

Comments on the following questions / statements in English:

- (a) Edo-period sellers of medications did not carry anything apart from medications.
- (b) Each individual paid ahead for a specific amount of medication.

(TURN OVER)

SECTION B

(1) Translate into English the following passage from an **unseen text**: [40 marks]

トピック・コラム

ベトナム戦争と日本

遠藤 聡

ベトナム戦争のとき、沖縄は「アメリカ」であった。アメリカの施政権の下、沖縄は米軍のベトナムへの出撃基地となっていた。一九六八年一月、嘉手納基地に戦略爆撃機B52が墜落し爆発した。「日本」と「ベトナムの戦場」が直結している事実が爆発音と炎とともに呼び起こされた瞬間であった。沖縄は一九七二年五月に日本に返還されるが、それは翌年一九七三年三月の米軍撤退、すなわち「アメリカの戦争」の終わりを前にしたものであった。

二〇〇四年八月、沖縄国際大学構内に米軍ヘリが墜落した。この事件は、「基地の島」である沖縄の実情を日本社会に再確認させるとともに、沖縄の人々にとってベトナム戦争の記憶を呼び起こすものであった。二〇一〇年二月には、B52が嘉手納基地に約二〇年ぶりに着陸した。これはシンガポールで開催される航空ショーに参加する途中、空中給油機の整備不良による給油のための緊急措置であったが、沖縄の人々に衝撃を与える事件であった。

ベトナム戦争の時代、一九六八年一月一九日早朝、嘉手

納基地でB52が離陸に失敗し、墜落・爆発を起こす事件が発生した。乗員二名のほか付近住民一六人が重軽傷を負い、爆風で多くの民家が被害を受けた。大きな爆発音は沖縄戦の記憶を呼び起こしたという。「黒い殺し屋」とも呼ばれたB52は、沖縄とベトナムの戦場を直結する象徴であった。

一九五二年四月、サンフランシスコ講和条約が発効し、日本は国際社会に復帰した。同時にこの日は、沖縄がアメリカの施政権の下に入る日であった。また、同日に発効した日米安保条約によって、日本の本土には「日本と極東を守る」米軍基地が置かれることになった。そして、その後のアメリカのベトナム戦争への介入によって、日本と沖縄の米軍基地は新たな役割を求められることになった。極東条項と事前協議制度という「制約」に包まれながらも、本土の米軍基地は、米軍の出撃、補給・修理、情報・通信、休養・慰安などの場として、アメリカのベトナム戦争遂行に対して重要な役割を果たしていた。ベトナムでの爆撃作戦を支えていた第七艦隊は横須賀と佐世保の米軍基地を拠点としていた。

そして、アメリカの施政権下にあった沖縄では、米軍基地の自由使用が認められているほか、その地理的利便性からも、まさしく米軍の出撃基地となっていた。一九六五年三月、南ベトナムのダナンに米海兵隊が上陸し、アメリカの直接軍事介入が始まったが、その部隊の一部は沖縄駐留の海兵隊であった。「アメリカの戦争」は「沖縄」から始まったのである。

*嘉手納基地: Kadena Base

*横須賀: Yokosuka

*佐世保: Sasebo

NAKANO SATOSHI, “Betonomy sensō no jidai,” in WADA HARUKI, et al, eds.,
Higashi Ajia kingendai tsūshi, vol 8, Iwanami shoten, 2011, p. 40.

(TURN OVER)

(2) Translate into English the following passage from a **seen** text: [30 marks]

そのため、アメリカに日本防衛の義務をうたわせる方向で安保を改定するには、日本が憲法を改正して、再軍備と海外派兵を可能にするのが早道であった。少なくとも、何らかの方法でアメリカの国際戦略に貢献できなければ、安保条約をより対等の関係に近づけることは不可能だというのが、岸をはじめ保守政権の考えだった。岸が述べた「日米の間に水も漏らさぬ考え方の一致があつて初めていろいろやれる」という主張は、こうした考えを述べたものにはかならない。

いわば岸首相も国際問題談話会も、経済成長を遂げつつあった日本にとって、「サンフランシスコ体制」が桎梏になつてゐるという認識では一致していた。ただその桎梏を見なおす方向が、対米従属の解消と非武装中立という方向であるのか、それとも再軍備と改憲によつてアメリカに対等のパートナーと認知してもらう方向なのかで、立場が分かれていたのである。

一九五七年から五九年にかけての日米交渉で、岸による安保改定交渉は、大筋が固まつていった。その中核は、アメリカに日本防衛の義務を課すかわりに、日本は国内——この「国内」が沖縄を含むのか否かが、一つの焦点になつたことは後述する——の米軍基地が攻撃された場合にも、日本が攻撃されたものとみなして対応するという規定だった。そして「極東」の安定のため米軍に基地を提供すること、旧安保条約が無期限だったのにたいし有効期限を一〇年とすること、核兵器の持ちこみには事前協議をすることなどが盛りこまれた。

こうした規定は、岸政権からすれば、旧安保条約よりも対等条約に近づけたものであった。しかし核兵器持ちこみの事前協議は形式的なものにすぎないうえ、「極東」の範囲が不明確で、相当な拡大解釈が可能であった。変転する国際情勢のなかで、一〇年という長期間の拘束があることと、在日米軍基地への攻撃によつて日本が戦争にまきこまれる危険性も問題とされた。

OGUMA EIJI, *Minshu to aikoku*, Shinyōsha, 2002, p. 502.

(3) **Comment** in English on this **unseen** text by answering the following question: In what sense can Japan be judged to have been a “winner” or “loser” of the Cold War?. [30 marks]

1 「冷戦の勝者」日本の「敗北」

冷戦の終結した 1989 年は、世界に占める日本経済の比重が極大値を指した瞬間であった。石油危機後の不況から 70 年代末に立ち直った日本経済は、80 年代を通じて主要工業生産の分野で断然たる強さを示し、米欧の追随を許さなかった。経済国家としての戦後日本がピークを迎えていたのである。80 年代を迎えたころの日本は「1 割国家」であったが（第 5 章 1 参照）、80 年代を終えるころには世界経済の 15% を占めるに至っていた。

(TURN OVER)

そうであれば、冷戦終結直後の米国に、「今後の脅威はソ連ではなく日本である」といった世論調査結果が出たり、「冷戦の真の勝者はアメリカではなく、日本とドイツである」といった論評が現れたりしたのも不思議ではなかった。戦略的対立を主要テーマとする二極体制が過ぎ去れば、従来以上に経済力が重要となろうと想定された。経済超大国・日本は、その潮流の中でいっそう輝くことができるであろうか。1990年7月のヒューストン・サミットには、その可能性を予感させるところもあった。

サミットを前に日本外交は、米欧のメンバー国に対して、前年6月の天安門事件で国際的非難を浴びた中国について、いつまでも国際的に孤立させてはならないと制裁解除のイニシアティブをとった。G.ブッシュ米大統領は同意し、人権問題の重大さゆえに慎重であった西欧諸国も、やがて基本的に同調した。天安門事件以後の東アジア国際関係において、「平常への復帰」を日本外交がリードしたのである。経済大国が政治的重みをもアジアで持つのが趨勢^{すうせい}なのである。

湾岸危機／戦争

実は、日本が「冷戦の勝者」であるとの評は正確ではなかった。日本は冷戦を中心的に戦っての勝者ではなく、できるだけ戦うことを回避しつつ、冷戦体制の反射的利益を享受して、最大受益者となったにすぎなかった。主体的勝者と受益者の差は大きい。そのことを如実に示したのが、湾岸危機に際しての日本の対応力の欠如であった。

湾岸危機に際して日本が問われたのは、外交技術や外交能力の問題であるよりも、日本人の国際認識の枠組みそのものであった。戦後日本は憲法9条を奉じて、平和に至上の価値を認めてきた。戦後日本は、自衛戦争が許されるか否かを本気で議論する世界で唯一の

社会であった。国民の圧倒的多数が自衛隊を容認するに至ったが（図3-2参照）、野党第一党の社会党を中心とする革新勢力は、強固に自衛戦争と自衛隊を否定し続けた。しかも野党第一党の原理的反対は、国会の機能を麻痺^{まひ}させることができた。米国の安全保障の下で、通商と経済の仕事を全うすることを最重要と考える政府与党は、現実に沿った安全保障政策を提起して野党を刺激することを避けてきた。その結果、戦争か平和か、軍国主義復活か民主主義か、侵略か自衛かといった、激しくはあったが観念的な1950年代の二分法の議論に国民の安全保障認識はとどまっていた。戦後日本国民の心の辞書には、戦争は2種類、侵略戦争と自衛戦争のみとなっていた。

1990年8月2日にイラクがクウェートを侵略したことに始まる湾岸危機／戦争は、もとより日本にとって自衛戦争でも侵略戦争でもなく、したがって日本国民の心の辞書には存在しない項目であった。他国と争わず、他国間の争いにもかかわらないことが、平和主義的なよき振る舞いとして国際社会からも称賛されるものと、戦後日本人は思ってきた。その認識は、日本が過去の戦争の責任国として社会更生中であり、かつ貧しい敗戦国であった時期には妥当性があった。しかし75年以来、日本はG7サミットのメンバーとして、米欧日三極の一つを構成する経済大国であった（第4章2参照）。

自らの必要な石油の7割を中東に依存するのみならず、世界経済の15%を一国で占めるビッグ3の一つであれば、国際社会全体が平和と安全のうちに暮らしていけるよう、管理責任を分担せねばならない。無法者が暴挙を働けば、国際社会の安全と秩序のために取り抑える仕事にも加わらねばならない。腕力によって、現場で強制執行の役を担うかどうかは適性や能力次第であり、経済と民生部門を本業とする日本自らが必ずしもしなくてもよい。要は、国際安全

(TURN OVER)

保障への主体的な責任意識の問題であり、国際社会における「寄合」もしくは「世話役」の一員としての自覚であった。戦後平和主義の惰性の中で、日本国民にとっては、湾岸戦争において後方支援や輸送や医療協力といった活動への参加すら容易でなかった。

湾岸戦争に適切に関与できなかった日本は、世界中より非難を浴びてから総額 130 億ドルの資金協力を申し出て、なお軽侮の対象にとどまった。それは、まさしく日本の「敗北」であった。戦争が終わった後、掃海艇をペルシャ湾へ派遣して、いささか評判を回復するのがやっとであった。

朝鮮半島の冷戦後

もう一つ、日本外交のささやかな「敗北」があった。冷戦終結後の急流が朝鮮半島をも洗い流し始めた。韓国の盧泰愚大統領は全神経を集中させて「北方外交」の指揮をとり、1990 年 9 月には経済援助を提供しつつソ連との国交を樹立し、並行してひそかに中国とも国交樹立のための措置をとり始めた。冷戦終結期の国際大変動を機敏に自国の機会に結びつけた韓国政府の、北朝鮮に対する圧倒的な外交的勝利であった。

この動きに大きな衝撃を受けた北朝鮮は、外交的反撃として日本への接近を試みた。1990 年 9 月、^{キム・イルソン}金日成主席は自民党の実力者・金丸信を団長とする自民・社会両党の代表団を^{ピョンヤン}平壤に招いて歓待し、ソ連への怒りを表明して、即時日朝関係正常化を提案した。金丸は差し出された手を握り返して合意したが、外交の素人ぶりをも露呈した。随行した外交助言者を外して交渉をつめる政治的決意を示し、最終的に、36 年に及ぶ植民地支配だけでなく、第二次世界大戦後の 45 年間の不正常な関係についてまで、日本が謝罪し償うと約束した。

IOKIBE MAKOTO (ed.), *Sengo Nihon gaikōshi* (Yuhikaku, 2006), pp. 235-38.

END OF PAPER

Page 16 of 16